

笛を吹く（杜甫）

笛を吹く 秋山 風月の清きに

誰が家か 巧に作す 断腸の 声

風は 律呂を 飄して 相和すること 切に

月は 関山に 傍て 幾処か 明なる

胡騎 中宵 北走するに 堪えたり

武陵の 一曲 南征を 想う

故園の 楊柳 今 揺落す

何ぞ 愁中に 却つて 尽く 生ずるを 得し

吹笛秋山風月清 誰家巧作斷腸聲  
風飄律呂相和切 月傍關山幾處明  
胡騎中宵堪北走 武陵一曲想南征  
故園楊柳今揺落 何得愁中卻盡生

解説 秋の夜、笛の音を聞きながら詠じた詩。

語釈 ※秋山 秋の山。 ※風月 風と月。 ※断腸声 腸がちぎれるほどの悲しさの声。 ※律呂 音律の意味。 十二律の奇数番目の六つの音律を律、偶数番目の六つの音律を呂といい（六律六呂）、その両者をあわせて「十二律呂」とよぶ。 ※飄 びるがえる。 ※関山 関所のある山。 ※傍 寄り添う。 ※幾処 いくつかの峰。 ※胡騎 異民族。 ※中宵 真夜中。 ※北走 北に向かつて走る。 ※武陵 一曲 後漢の馬援が南方征伐に出たとき、武陵に駐屯し、笛の上手な部下に新曲を作らせて、「武陵深」と命名したという故事。 ※南征 南方の国を征討する。 ※故園 生まれ故郷。 ふるさと。 ※揺落 秋に草木の葉がしばみ、風でゆれおちること。 ※愁中 悲しみの中。

通釈 秋の山の風も月も清らかな時、誰が吹くのか、巧みな笛の音は腸がちぎれるほど悲しい。 風は律呂の響きを翻して調和もとれ、月は関山に寄り添うて、幾つかの峰に晴れわたっている。 真夜中に胡騎が北方の故郷へ逃げ去ったのは、この笛の武陵一曲を聞いたからで有ろう。 故郷の柳も秋に草木の葉がしばみ風でゆれおちる。 どうして愁いに満ちた私の心中で「折楊柳」の曲をきくと、その枝を折って別れの嘆きをくり返すことが出来ようか。